

2014.5.4 「辺境に立つ」マルコによる福音書3:20～30

イエスは「ベルゼブルに取りつかれている」と言われた。このベルゼブルは「悪霊の頭」ということだが、実はこのベルゼブルは、異教の神の名であるという。またその意味するところで「蠅の王」というのもある。蠅に対する崇拝は、古代ギリシャ、ヨーロッパのあちこちで信じられてきた。蠅は、どこからともなく飛んで来て、死んだ人にとまる。蠅は靈魂を運ぶ者、靈魂の生まれ変わりを見なされ、その蠅を呑み込んだ女は、子どもをみごもることができるという信仰もあったという。しかしそれはあくまでギリシャ神話でユダヤ人においてはただの汚れでしかない。イエスが、ベルゼブル呼ばわりされたのは、罪人扱いされている病人や、悪霊に取りつかれているとされる人々に次から次へと接していく有様を見て、まるで蠅が汚れた物に次から次へとたかるのに似ているという皮肉でもあろう。

そういうイエスは「気が変になっている」と言われるわけである。当時の常識からすれば逸脱した、かけ離れた行動であった。この「気が変になっている」という言葉は、文字通り訳せば「外に立つ」という言葉にもなる。「常識の外に立つ」という意味だが、確かにイエスは常識の外に立っている。病人を癒し、生かそうとすること。そのこと自体が常識を逸脱した行為だった。しかしそこにこそ、イエスの神髄があったといえる。イエスが立たれた「外」とはまさに、病のため、あるいは罪人と見なされたが為に共同体から、地域から排除され、隔離された人々が立たされているところの「外」「辺境」でもあった。イエスは彼らが追いやられている場所、その同じ場所の辺境に立ったのである。

この世の常識は権力のもとにあるといえよう。日本の常識もまた、中央にあるといえよう。東京に。全ては、その常識で物事を考え、推し進めて行こうとする。東京のエネルギーを確保するために、東北の福島に原子力発電所を置く。日米安保を維持するために、沖縄に米軍基地を押し付ける。政府の考えが盛り込まれた超保守的な「育鵬社」の教科書を、沖縄のさらに辺境の地である離島に政府が直接関与し、自分たちの常識を押しつける。この国の常識に反する者は、排除の対象とされるのが常である。そのことからすると、聖書の時代も、現代もさほど変わっていない。

ヘブライ人への手紙に「それで、イエスもまた、御自分の血で民を聖なる者とするために、門の外で苦難に遭われたのです。だから、わたしたちは、イエスが受けられた辱めを担い、宿営の外に出て、そのみもとに赴こう」(13:12,13)。

私たちはイエスの後に赴き、「辺境に立つ」ことが出来るだろうか。(神谷)